

国際アンデルセン大賞
名作全集 9

ルネ = ギヨ 作
那須辰造 訳
瀬川康男 絵



どうの王子さま



9

国際アンデルセン大賞名作全集

ぞうの王子さま

ルネ = ギヨ 作

那須辰造 訳



国際アンデルセン大賞名作全集 9

ぞうの王子さま

N. D. C. 953 講談社 278 P 23 cm

昭和 43 年 10 月 20 日 第 1 刷発行

作 者 ル ネ ニ ギ ヨ

訳 者 那 須 辰 造

発行者 野 間 省 一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2—12—21

郵便番号 112

電話 東京 (942) 1111 <大代表>

振替口座 東京 3930

印 刷 凸版印刷株式会社

製 本 藤沢製本株式会社

定価 590 円

© 1968

Sama, prince des éléphants

Written by

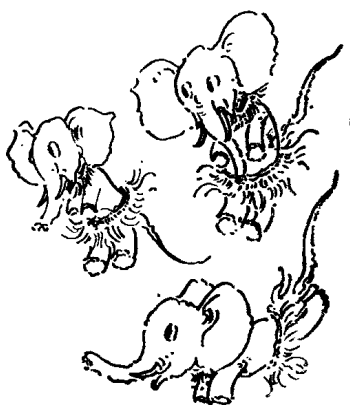
René Guillot

1950

Japanese translation rights arranged through

Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。 Printed in Japan



ものがたり
この物語について

どこの動物園でも、たくさん動物の中で、いちばん人気のあるのはぞうですね。からだはすごく大きいけれど、長い鼻をぶらぶらさせ、小さな目をぱちくりさせながら、ゆっくりゆっくりあるいています。人間のばあいなら、「おひとよし」といった感じですよ。そうかと思うと、あの長い鼻のさきで、すぐじょうずに食べものをつかんで、口に入れます。それを見てみると、「大きなからだににあわず、こまかい神経をもってるんだなあ。」と思わずにはいられません。ほんとうにぞうくらい、したい感じのする動物はありません。

それというのも、ぞうは肉食動物ではないので、ひょうやおおかみみたいなすごさが、すがたにも動作にも見られないのです。しかし、いっぱんの草食動物のような、きよろきよろ、おどおどしたところはありません。ずるい感じなどすこしもなくて、山のようにどっしりしています。そして何もしないで立っているときには、まるで哲人のように、ふかい考えごとをしているみたいです。でも、いったんおこると、ぞうくらいものすごい動物はありません。なにしろ大きなからだですから、どんな野獣をもふみつぶしたり、大きなきばで、

つきころしてしまふのです。

このように、やさしくて考えぶかくて、強いぞうたちは、東南アジアやインドや、アフリカの、大草原やジャングルで、どんな生活をしているのでしょうか。

この「ぞうの王子さま」には、生まれたばかりのぞうの子が、アフリカの大自然の中で成長していくあいだのことが、いきいきとえがかれています。これは小説ですけれど、作者のルネ・ギヨさんは長らくアフリカで暮らして、野獣狩りをしたり、生けどりにした野獣の子をそだてたりして、アフリカの野獣の生活をよく知っている人です。どんな探検記でよりも、ぞうのほんとうの生活を、わたしたちは知ることができるでしょう。

ぞうの子さまは、おとなのぞうになるまでに、それはそれはいへんな経験をするのです。アフリカのきびしい自然、おそろしい日であり、人間のわるだくみ、おそろしい火の力など、ぞうたちは、いまにも死にそうなめに、なんべんも出あうのです。そして、ひしに生きつづけるのです。ぞうにとっては、お

となになるということは、なんときびしいことでしょう。でも、なんと冒険に
みちていることでしょう。

作者のルネリギヨさんは、だんだん強くなっていくぞうの子を、まるでわが
子が成長していくのを見るような愛情の目で、ぞうの子サマをえがいていま
す。人間の少年少女も、このように、どんなことにも負けないで成長してく
ださいと、ギヨさんは、心をこめてこの作品を書いたのにちがいありません。

昭和四十三年八月

那須辰造



も く じ



この物語^{ものがたり}について

はじめに..... 11

1 動くもの..... 15

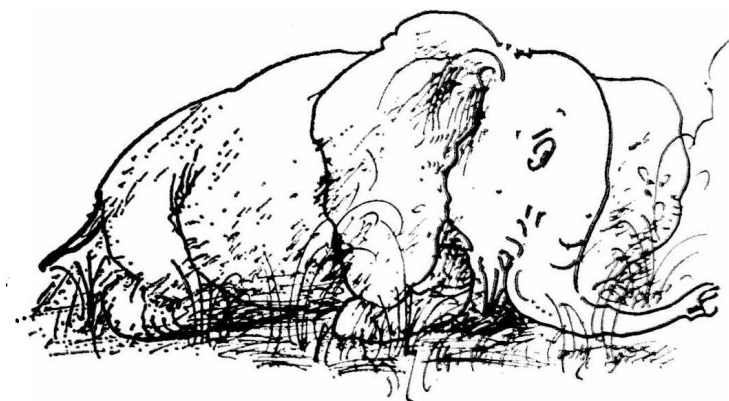
2 かばのいる沼^{ぬま}..... 41

3 ぞうの墓場^{はかば}..... 59

4 ぞうのこびと..... 81

5 火^ひぜめの狩^かり..... 106

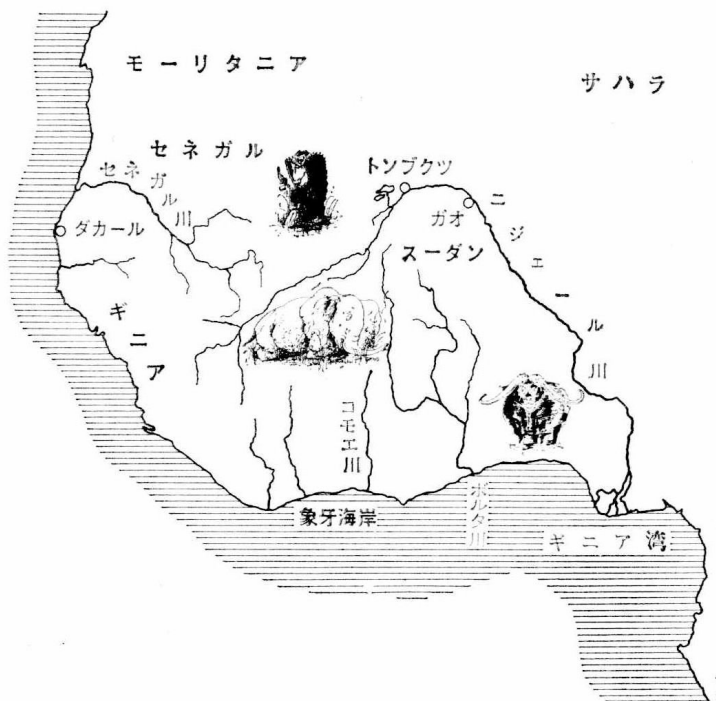
6 生^いけどり..... 134



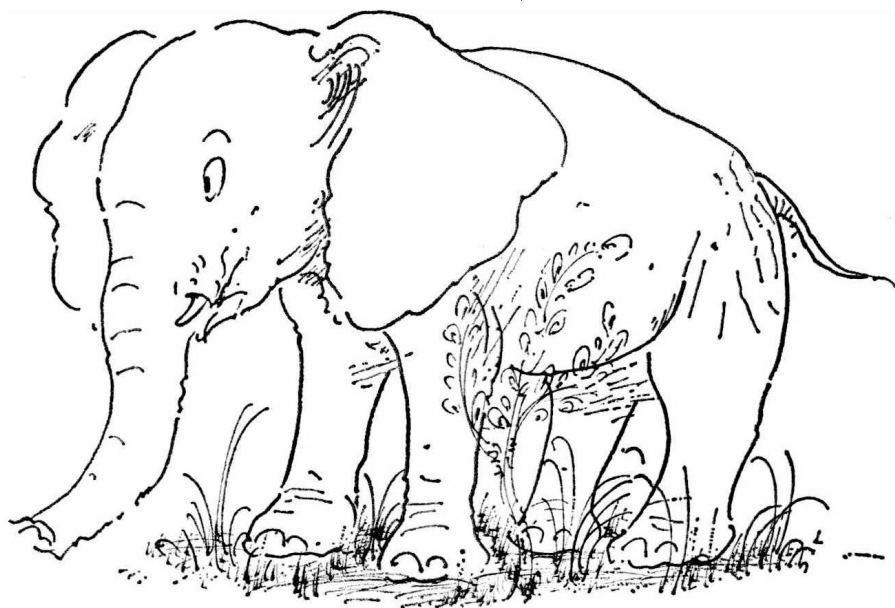
7	ラルーナの小屋 ^{こや}	159
8	はいってはない土地 ^{とち}	184
9	大きなおそれ.....	207
10	さいこの道 ^{みち}	225
11	サーカス.....	243
12	ほえろ！.....	255
	作者ルネリギヨについて.....	276

装本
辻村益朗

ぞうの王子^{おうじ}さま



はじめに



ぼくは、サマや、サマのきょうだいを知っています。

サマは、サマの子孫なのです。黒ボルタ川がさかいになっているコモエ地方では、すべてのぞうはサマの子孫なのでした。ロビ族の黒人たちはぞうのことを、サマとよんでいます。だから、どのぞうもみな、サマの子なのです。

コモエの人たちは、ぞうも自分たちとおなじ迷信をもっていると、思いこんでいます。ジャングルの、はげしい太陽の光の下では、人間だってぞうだって、みんな、まっばだかなのですから。

ぼくは、この話にでてくるバンバスの橋をわたりました。そこは、人間の土地と動物の土地とをわけるといふ、おもしろいさかいなのです。赤い土でこしらえた小さな人形が、ロビ族のほうの岸にも、動物のほうの岸にも立てられています。これは、どちらの土地をもまもる、魔よけの人形です。こちらがわの人形は、歯をとがらしているロビ族をまもります。狩りとしてきたなまの肉をくいちぎるために、やすりで、歯をとがらしてあるのです。そして、むこうがわの人形は、もちろんぞうをまもるのです。

ぼくは、コモエのクルミタンというところで、サマを知りました。焼けつくように暑いジャングルをいくつも、じしゃくをたよりにこえて、狩りにいったのです。そこは、黒人ばかり住んでいる地方のまんなかでした。自然だけがつくることができる、ほんとにうつくしい公園でした。春には、人間の世の中がは

じまるより前にあったようなふしぎが、いまも見られるのです。動物たちは、生まれたままといたいくらい、むじゃきです。しかの子は、はじめてはねとぶときのように、はねています。はじめて走るときのようなかっこうで、かけまわっています。

黄色の大草原は、太陽のゆたかな光をうけて、どこまでもひろがっています。どの木も、どの木も、すくすくのびています。金の玉のかざりをしたコラチエの木やゴムの木にまじって、ぞうのだいすきなわかをつけた大きなネレがのびあがっています。もじゃもじゃに上げた草の上に、ほそい光のすじがさしています。野の花は、まぶしく目にしみます。

いま、ジャングルでは、草も木も動物も、やさしくてわかかわかしい気持ちでいっぱいなのです。

サマは、このジャングル地方の王さまでした。

ぼくは、サマの子をつかまえました。まだ小さく、おとなしく、肉のかたまりのようにやわらかく、足はまだみじかくて、まるまるしていました。この子は、生まれてから一か月もたっていないのでした。あまり小さいので、めうしのちちをすわせてやることもできません。それに、そこはジャングルのまんなかで、ロビ族のいちばん近い村からでも、百二十キロもはなれていました。それで、このサマの子を、草原へかえしてしまいました。ぞうのむれがボルタ川のほうへいったとき、そのかえり道へおいてやったのです。

そのあと、なんべんも森の中で、サマのほかの子をみつけました。ぞうたちは、王さまのぞうにひきいられて、雨の道すじを、たえずあるきつづけています。その道で、みつかるのです。

ぼくは、火を発明したぞうの話を書きたいと思いました。そのぞうは、人間よりすぐれていたかもしれせん。しかし人間は、ぞうみたいにあてもなくあるくようなことはしせん。畑をつくってくらしているのですから、やっぱり人間のほうがすぐれているのでしょうか。

サマは、ぼくの友だちです。

ぼくは、ジャングルのさまざまな動物となかよしになりました。ぼくのごぶしにまきつく、小さなみどりのへびをかわいがったこともあります。砂のめじかといわれるケウエルの子を、哺乳器でそだてたこともあります。この小さなしかは、ぼくの家で大きくなりました。ときどき、ぼくの巻きたばこをたべては、しんじゆのようなかわいい目で、ぼくを見たものです。ケパールという、いぬでもない、ねこでもない、ひょうでもない動物を、かわいがったこともあります。

でも、ほんとうに友だちといってよいのは、サマです。パンバス川の岸のラルナで、マロー家にかわれていたぞうも、サマとよばれていました。これから、みなさんに、そのサマの話をいたしましょう。